

# 東北 VALUE SIGHT 秋田



株式会社恋する鹿角カンパニー 専務取締役  
道の駅おおゆ 駅長  
**浅利 裕子 (あさり・ひろこ)**  
1975年9月 秋田県鹿角市生まれ  
2001年4月 鹿角市役所入庁  
2018年3月 鹿角市役所退職  
2018年4月 株式会社恋する鹿角カンパニー設立にあたり出資者として参画。同社専務取締役兼「道の駅おおゆ」駅長に就任  
  
株式会社恋する鹿角カンパニー  
秋田県鹿角市十和田大湯字中谷地19道の駅おおゆ  
TEL 0186-22-4184

2018年4月、秋田県鹿角市に新たな観光拠点施設「道の駅おおゆ」がオープンした。そのコンセプトは「縁が輪になる、大湯のえんがわ」。地元の人たちの交流の場、外の地域の人たちを受け入れる場、そして地域の魅力を発信する場などの機能を持ち、地域に新たな賑わいを生み出している。  
駅長を務めるのは、鹿角市職員の経歴をもつ浅利裕子さん。前職で得た人との縁・経験が導いてくれたという現在の職場で、地域のため、また、自身の志である「地域の農業の価値向上」のために、日々全力を注いでいる。

## ときめきとわくわくを創造する 道の駅で ありたい ～「道の駅おおゆ」管理運営への挑戦～

### 縁が輪になる、大湯のえんがわ

2018（平成30）年4月28日、鹿角市の大湯温泉郷に秋田県内32番目の道の駅となる「道の駅おおゆ」が新たに開業した。準備に与えられた期間は約3カ月。建物は完成に近づいていたが、運営管理などソフト面についてはほぼゼロからのスタートだった。

「道の駅おおゆ」の運営コンセプトは「縁が輪になる、大湯のえんがわ」。縁側というのは、外と内の空間をつなぐ窓口の意味合いもある。鹿角・大湯の魅力的な人や商材、歴史や伝統などの資源をまとめ、外側の人たちとの間のご縁を結ぶつなぎ目として、いわば「地域商社」としても機能することを目指している。東京の国立競技場も手がける名匠・隈研吾先生による建築は、まさにその縁側性を表現している。



4月28日のオープンセレモニー  
隈研吾氏も駆けつけ、盛大に開催された

### 縁が輪になり、恋する鹿角カンパニー

2018（平成30）年1月、「道の駅おおゆ」の指定管理者を引き受けたのは、菅原久典社長が率いる秋田市のノリット・ジャポン株式会社である。とはいえ、秋田市と大湯との距離は車で2時間半と遠い。現地で実際に管理運営を行う主体が必要との判断か

ら、ノリット・ジャポン社は、同社と鹿角市に縁が深い永松繁隆氏が社長を務める永楽商店合同会社（東京）、そして私と共同出資する形で、2018（平成30）年4月に「株式会社恋する鹿角カンパニー」を設立した。

なぜ、市役所職員だった私が出資者に加わり、となり、「道の駅おおゆ」の駅長となったのか—それは、前職で得た人との縁があったからに、ほかならない。

鹿角市役所在籍時に国際交流、生涯学習、観光と、外向きの部署を渡り歩いた私は、その当時から菅原氏、永松氏と縁があった。2人との仕事は創造的かつ刺激的で、いつかまた一緒に仕事ができたらと思っていた。一方で、2012（平成24）年度から携わることになった農業分野では、自然を受け入れながらも挑戦を続け、創造的な知恵が豊富な農家の皆さんに触れ、農業の魅力にもどんどん引き込まれて行くことになった。この頃「創造性」というキーワードに「ときめき」と「わくわく」を感じている自分に気づいた。

仕事に創造性を強く求めること、それは同時に自分自身の人生や毎日をどう創り出していくか、という自問自答の始まりにもなった。創造性あふれる農業分野で生き残りたい。しかし異動が宿命の公務員に、同じフィールドに居続けられる保証はない。そのことが起業を考えるきっかけともなった。

6年間の農林課在籍中、私は生産・栽培側の部署において鹿角の農業、ひいては秋田県、日本の農業の価値はもっと高く評価されるべきだと思いつけてきた。【人間が生きていく上で必要な「食」を支える農業の価値】は歪んでしまっているように感じてい

た。だからこそシンプルに分かりやすくその価値を消費者に伝えることから始めたいと思っていたし、私自身が鹿角や全国の農家にふれるうち感じていた栽培の奥深さや職人的な技術の高さ、面白さ等を丁寧に伝え、その価値が正しく消費されるようにしたいと考えるようになった。

とはいえ、それは漠然とした思いでしかなく、賢く段取りよく計画的に実現に向かって進めることはできなかった。そんな折、経営に無知で気持ちだけの私に、偶然、巡り合わせたかのように機会がやってきた。縁のある2人が「道の駅おおゆ」の管理運営に手を挙げることとなったのだ。

縁とは本当に不思議なもので、悶々とした悩みを相談していたことが今回のご縁につながった。私のほんやりとした志を聞いてくれていた菅原氏、永松氏が、「一緒に実現しましょう」と声をかけてくれた。彼らも相当な覚悟で私に声をかけたと思うし、ある種賭けだったに違いない。志が重なっただけで賭けるなんて、まるで幕末時代劇のようだが、それがなければ創造性にあふれたこの毎日がなかったのは確かだ。

### 縁を輪にする、創造の喜び

縁が輪になり、私は新たなフィールドを得ることになったわけだが、現実には容赦なく向かってきた。通常道の駅の開業準備には最低でも2年を要すると言われていた中で、与えられた時間は約3カ月。指定管理料はゼロ円。ただ得意な好きなこと、やりたいことをやればよい、ただ会社を作ればよいという話ではない。やらねばならぬことが手から溢れては

拾い、次から次へと増えるタスクをこなす日々一杯であった。

しかし、私はずっとわくわくしていた。望んでいた創造のある毎日になったからだ。疲れも緊張もあったが、オープンに向けて全員で創り出していることが楽しくて仕方なかった。短いながらも中身の濃い時間を過ごしたことで信頼できる心強い仲間とスタッフにも恵まれた。友人、知人、家族、農家の方々はずっと励まし、応援してくれたことも大きな支えになっていた。

この1年間は走りながらの準備期間でもあった。オープン当時のことを振り返ると、何年も前のことのように感じる。毎日が試行錯誤の連続で、いろいろな失敗も重ねながら、経験を血肉に変えてきた。さまざまなご心配をおかけしていることも自覚しているが、今年4月を正真正銘のグランドオープンと位置付け、創造力を磨き、新たな一歩をスタートさせたい。たくさんの支援者、協力者、理解者のお力添えで仕上げた「道の駅おおゆ」を、次のステージに引き上げるのだ。それは農業の価値を高めたい、という私の志を実現するひとつの手段でもある。

たくさんのご縁をいただきながら、ご縁を化学反応させながら進む「道の駅おおゆ」。これからの展開にご期待いただきたい。



秋の夕暮れ。風景に溶け込むデザインと空間には好評をいただいている